

2018年の4月からボランティアとして受け入れていただき、早くも4年近くが経とうとしていますが、その間、多くの患者様のベッドサイドを訪問、終末期の大切な時間を一緒に過ごす機会を与えていただきました。この一見変わった活動に対して、当初からベトレハムの園病院は大変よく理解していただきましたし、しばらくすると、一ボランティアであるにも関わらず、スタッフの方々がチームの一員として迎えてくださっていることを実感するようになりました。何よりも患者様によりよい終末期を過ごしていただきたい、そしてご家族にとっても納得のいくような看取りを提供したい、という静かな、しかし熱い空気が病院全体に感じられますので、週に一度、ボランティアをさせていただくことが、私自身にとって、かけがえのない時間、得難い経験となっています。

この空気を、パストラルハープの活動をしている仲間たちや後輩たちと共有したい、また病院の取り組みについて、直接スタッフの方からお話を伺ってみたいと願っていたところ、なんと病院側から快諾をいただき、去る12月6日、病院とパストラルハープ奉仕者による合同研修会が実現したのです。

当日は青木院長による「病院紹介」、窪田看護部長による「看取り期に私たちが出来たこと、そしてさらに提供できること」、平野パストラルケアワーカーによる「命を慈しむ関わり」の発表が行われ、創立者の思いや、創立以来、この病院が大切にしてくられた理念を知ることができ、それらを具体的に実現するために今に至るまでたゆまなくご努力が続けられていることが3つの発表を通して大変よく分かりました。また、保田師長と遠藤師長からは、現場からのご意見やご質問、活動に対するフィードバックをいただき、なるほど！と気づかされたり励まされることが多々ありました。



パストラルハープ側の参加者の感想をいくつか紹介させていただきます。

「病院の理念に、パストラルハープの核心と響き合うものを感じました。医療的ケア、言葉による対話、音楽（ハープや歌）と、手段は違っていても、いずれも命の尊厳に寄り添うケアではないでしょうか」

「実習生の私たちのために病院の各部署の長の方々がわざわざ時間をとってくださり、感謝でした。外部の団体に対してもこのようにオープンな姿勢、またチームで研修を行っていただけたことにも驚きでした」

「院長先生はじめ職員の皆さんの明るく気さくなお人柄に、緊張が緩み、あたたかな気持ちになりました。研修に参加させていただいたことは嬉しく感謝なことでした」

「見守る・支えるを目標に、慈しみのケアをされていること、“お話を聞く時に、その方の心の声に焦点を合わせます”という傾聴を大切にしてくれていることに感銘いたしました。また、“傾聴は苦難を共にする愛の行為です”という言葉が深く心に残りました。もしも自分が終末期を迎えるときは、こちらでお世話になりたいという気持ちになりました」

「92床という少ない病床だからこそ、できるケアがあることを知り、少人数でパストラルハープを学んできた私たちの3年間の歩みと重なるものを感じました」

「“生きることは愛すること、愛することは行うこと”という創立者の神父様の言葉が大変印象に残っています。この言葉を教えてくださり感謝します」

